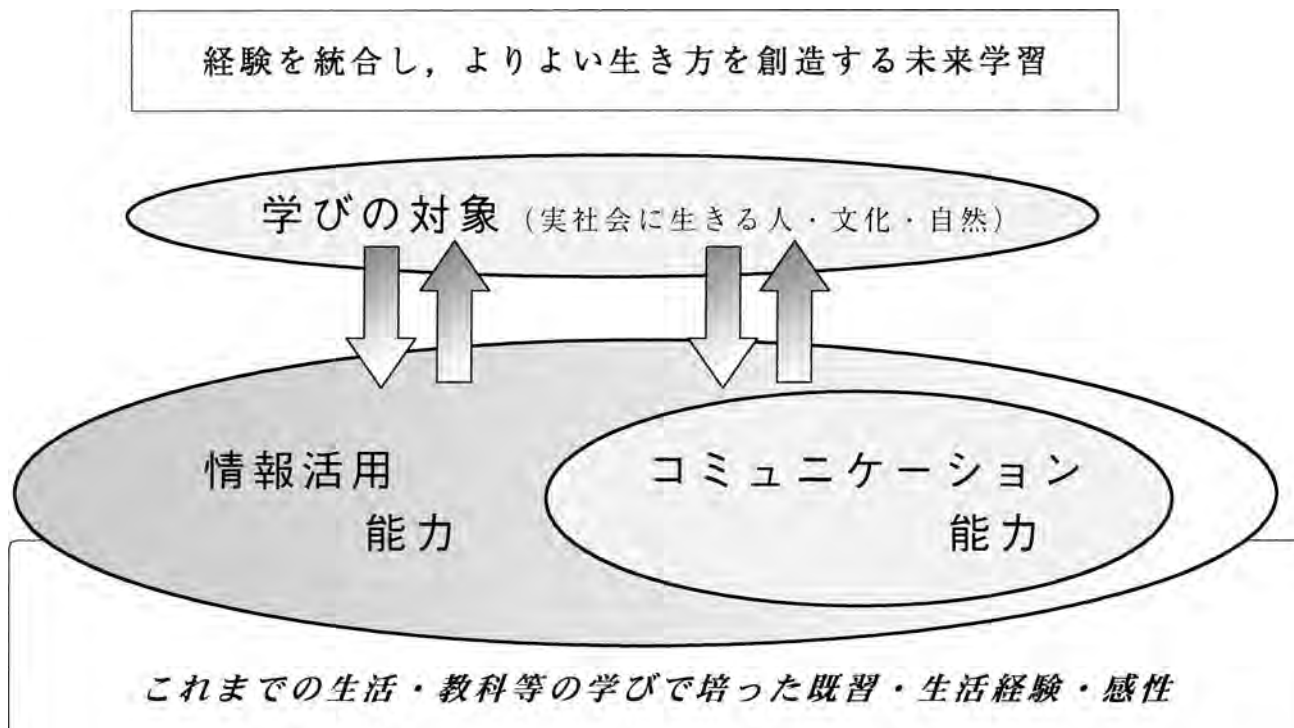


2 未来学習の取り組み

(1) これまでの取り組み

① 育てたい力



<未来学習で培う資質・能力>

本校では、未来学習で培うべき問題解決能力を「子どもが出入力する情報」という視点から捉え、広義の意味での「情報活用能力」として設定した。また、情報の収集、創造、発信のそれぞれの段階において、人権や文化的・社会的な環境、考え方の違いなど相手意識が発生する場合に必要な力として「対象理解」と「コミュニケーション能力」を挙げ、この3つの能力を未来学習で身に付けさせたい資質・能力と位置付けてきた。

一昨年度までは、上記の能力を「参画態度・協働態度」「実践力」「特性理解」の3観点に分類していたが、昨年度より、教科との関連をより明確にするために、教科と同じ「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の4観点に移行し、各学年ごとに評価マトリックス（次ページ参照）を作成した。



<評価の観点の移行>

| | 中学年 | 高学年 |
|-------|--|--|
| 関心・意欲 | <ul style="list-style-type: none"> ○情報の収集・創造・発信の際に、根拠をもって情報や情報手段を選択しようとする。 ○友達の考えや発した情報を大切にし、そのよさを見付けようとする。 | <ul style="list-style-type: none"> ○情報の正当性を意識しながら、情報を収集・創造・発信しようとする。 ○情報を扱うルールやマナー、モラルに配慮し、責任をもって、社会に対し情報を発信しようとする。 |
| 思考・判断 | <ul style="list-style-type: none"> ○情報の要点を見出したり、複数の情報を比較してその共通点・差異点を考えたりすることができる。 ○情報を自分の身近な事象と関連付けて考えることができる。 ○自分の考えを分かりやすく伝える表現方法を選択することができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ○複数の情報をもつ傾向や規則性について考えることができる。 ○目的を達成するために、適切な情報の収集・創造・発信の仕方を考えたり、適切な情報手段を選択したりすることができる。 ○情報を扱うルールやマナー、モラルと照らし合わせるながら、発信する情報の適切さについて考えることができる。 ○情報の特性に応じた表現方法（表やグラフなど）を考えることができる。 |
| 表現・技能 | <ul style="list-style-type: none"> ○問題解決のために、身近な人をはじめ、様々な書籍、メディアなどから情報を収集することができる。 ○収集した情報を整理して、伝えたいことを絵図や文章、資料に表現することができる。 ○情報機器を活用して、文字を編集し、表現に活かすことができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ○問題解決のために、適応した情報を、吟味しながら収集したり、再度集めたりすることができる。 ○収集した情報の特性に応じて、絵図や文に加えて、適切な表やグラフにまとめることができる。 ○情報機器を活用して、文字や画像を編集したり、音声を取り入れたりして、効果的に表現することができる。 ○自分の考えを構造的に表現し、伝えたいことを明確にして伝えることができる。 |
| 知識・理解 | <ul style="list-style-type: none"> ○情報には正しくないものも存在すること、情報は人に大きな影響を与えることを理解する。 ○個人情報の大切さと取り扱う際の留意点を理解する。 ○身近にある情報手段の種類や違いを理解する。 ○様々な情報機器の使い方（主として文字の編集）を理解する。 | <ul style="list-style-type: none"> ○情報には発信者の意図が含まれており、その信憑性を慎重に判断して利用する必要があることを理解する。 ○ホームページやメールなどを利用する際のルールやマナーを理解する。 ○知的所有権の意味とそれを保護する重要性を理解する。 ○様々な情報機器の使い方（主として画像の編集、メール）を理解する。 |

＜情報活用能力のマトリックス＞

| | 中学年 | 高学年 |
|-------|---|---|
| 関心・意欲 | <ul style="list-style-type: none"> ○身近な交流相手から情報を収集し、発信しようとする。 ○情報を伝えるために、交流相手の特性を踏まえ、その目的や内容を明確にして分かりやすく表現しようとする。 | <ul style="list-style-type: none"> ○専門家の方や他地域の方から情報を収集し、発信しようとする。 ○情報を伝えるために、相手の状況を踏まえて発信する等、相手のことを意識した言動をしようとする。 |
| 思考・判断 | <ul style="list-style-type: none"> ○交流相手の特性に応じて情報の収集方法や発信方法を選択することができる。 ○交流相手の特性を意識して自分の考えを表現する方法を工夫することができる。 ○交流相手に失礼のない言動について工夫することができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ○交流相手の特性や環境状況に応じて情報の収集方法や発信方法を選択したり、複数の方法を組み合わせたりすることができる。 ○交流相手の特性や環境状況を意識して自分の考えを表現する方法を工夫することができる。 ○複数の立場の相手を意識して情報収集・発信の方法や自分の考えを表現する工夫をすることができる。 ○交流相手が気持ちよく交流できるための言動について工夫することができる。 |
| 表現・技能 | <ul style="list-style-type: none"> ○身近な交流相手から情報を受信し、発信することができる。 ○交流相手の特性を意識した表現物を作成することができる。 ○交流相手に失礼のない言動をとることができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ○専門家の方や他地域の方と情報を交流することができる。 ○交流相手の特性や環境状況を意識した表現物を作成することができる。 ○交流相手と気持ちよく情報交流できるような言動をとることができる。 ○複数の立場の相手を意識して情報収集・発信をしたり考えを表現したりすることができる。 |
| 知識・理解 | <ul style="list-style-type: none"> ○身近な交流相手から情報を収集したり、発信したりすることで、情報や経験、気持ちを共有し、認識を深めたり、広げたりできることを理解する。 ○身近な交流相手から情報を収集したり、発信したりする際に気を付けることについて理解する。 | <ul style="list-style-type: none"> ○専門家の方や他地域の方から情報を収集したり、発信したりすることで情報や経験、気持ちを共有し、認識を深めたり、広げたりできることを理解する。 ○専門家の方や他地域の方から情報を収集したり、発信したりする際に気を付けることについて理解する。 |

＜コミュニケーション能力のマトリックス＞

② 領域編成

本校では、前述の能力をはぐくむために、多様な要素を併せもち、社会に位置付く現代的課題を取り上げるようにしている。それらは、「人」「文化」「自然」の領域に分かれる。そして、各学年で取り扱う課題については、領域網羅、内容精選の方向で編成していくこととした。

まず、第3学年から第6学年の4年間において、「人」「文化」「自然」の全ての領域を網羅できるように内容を配置した。

そして、学年を追って地理的な広がりや内容的な深まりが見られるようユニット計画の際に学年間の系統性に配慮した。例えば、文化の領域において第3学年から郷土を題材にしていくが、学年が上がるにつれ、扱う対象を広げ、第6学年の「国際理解」へと地理的な広がりを意識できるようにした。

なお、「情報リテラシーを高める教育」は、ユニット計画の中にトピック的に挿入し、情報収集、創造、発信のいずれかの過程で、内容に即して取り扱うこととした。

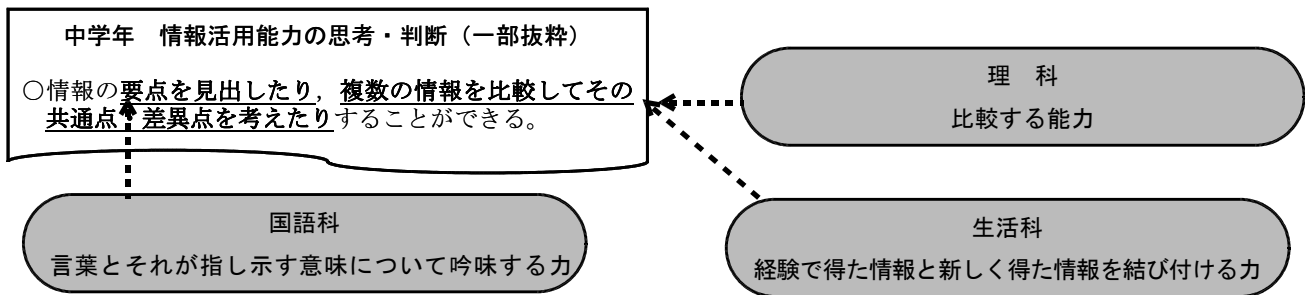
| | 未 来 学 習 | | | | | |
|------|---------|---------|-------|---------|-----|---------|
| | 人 | | 文 化 | | 自 然 | |
| 第3学年 | | | 郷 土 | 情報リテラシー | 環 境 | 情報リテラシー |
| 第4学年 | 人権・福祉 | 情報リテラシー | 郷 土 史 | 情報リテラシー | | |
| 第5学年 | | | 郷 土 | 情報リテラシー | 環 境 | 情報リテラシー |
| 第6学年 | 市民・職業 | 情報リテラシー | 国際理解 | 情報リテラシー | | |

<ユニット編成表>

③ ユニット計画の作成

未来学習では、限られた時間の中、多くの内容を取り扱うことが望まれている上に、教科の学びとの関連を図ることが求められている。そのため、何をいつどのように扱うのか、先を見通し、より具体的な計画を立てておくことが重要である。

そこでまず、本校の研究テーマである「思考力」に焦点を絞り教科との関連を図った。そして、各教科で培った「思考力」の中から未来学習に転移・活用できる「思考力」を特定した。



<例 中学年「情報活用能力」>

このことによって各教科で培った「思考力」を転移・活用する場をユニット計画に位置付けることが可能となった。

そして、未来学習のユニット計画において、教科で培った「思考力」を、転移・活用させたい各教科の「思考力」として、表内に位置付けた（次ページ参照）。なお、関連は、一方向で

はなく双方向に作用し合って初めて関連を図ったと言える。教科の「思考力」が未来学習において発揮される場面では、教科の学びへの動機付けとして逆方向にも生かすよう配慮することとした。

このように、学びの対象を現実社会に求め、その上で観点を移行し、教科との関連を図ってきたことは、先に述べた中教審答申の総合的な学習の時間の課題からも、「実社会の中で生きる力」すなわち、「人間力」の視点からも、その趣旨に則ったものであると言える。

| 第4学年未来学習（前期） | | | |
|--|---|--|---|
| ○ ユニット名 「広がる！ 深まる！ 心と心のさずな」（人権域） | | | |
| ○ ユニット計画 （総時数 40時間） | | | |
| 主な活動過程と子どもの意識 | 転移・活用させたい各教科の「思考力」 | 身に付けさせたい情報活用能力 | 身に付けさせたいコミュニケーション能力 |
| <p>養護学校の友達とどう接すれば？</p> <ul style="list-style-type: none"> オリエンテーション 養護学校の友達のビデオ視聴 仲良くなりたいな。そのために相手のことをよく知っておかないと・・・ <p>（2時間）</p> | <p>○ 交流相手に自分たちのことを紹介する方法を考える場面において、4年国語『知らせたい、あんなこと』で学んだ「伝えたいこと」の中心に気をつける」という思考様式を転移・活用させる。 <情報創造場面></p> | <p>○ 離れた場所にいるペアに伝えたいことがある場合、どのような方法で伝えるのがよいかを調べようとする。</p> | <p>○ ビデオに写った交流相手の様子を見て、交流の際に配慮すべき事の見直しをもととする。</p> |
| <p>養護学校の友達と仲良くなるよ</p> <ul style="list-style-type: none"> ペアやカードをのべて自己紹介 交流内容や自らの接し方を考える おにごっこやドッジボールをいっしょにしようと思うけど、できるのかな。去年交流した5年生や養護学校の先生に聞いてみよう。 第1回交流会でペアと楽しむ（西組） 絵や写真をいっしょに遊べたよ。友達の笑顔が見られて、私達もとても楽しい気持ちになったよ。またやりたいな。 交流内容や自らの接し方を振り返り、策案に伝える 西組の反省を踏まえて考えた交流内容で第2回交流会を楽しむ（東組） 最初は養護学校の友達と仲良く遊べないけど不安だったけど、相手の気持ちを考えて接していくよ。だんだん仲良くなれたよ。 <p>（14時間）</p> | <p>○ 自分たちの想いを相手に伝える場面において、3年国語『いろいろなもの伝達機能を考える』という思考様式を転移・活用させる。 <情報創造場面></p> <p>○ 養護学校の友達が使っている道具について考える場面において、3年社会『じげんやじこがおきたら』で学んだ「様々な人の立場から街づくりの工夫を見出す」という思考様式を転移・活用させる。 <情報収集場面></p> | <p>○ 本やインターネット、養護学校の先生、昨年度交流をした先輩等からの情報を基に総合的に考え、交流の内容を計画しようとする。</p> <p>○ 上記の二次情報と、直接体験で得た情報を関連させてまとめることで、次の活動に向けて、自分のもつ情報をよりよいものに改善することができる。</p> <p>○ 計画や実際の交流から、あらかじめ情報を得ておくことの良さについて理解する。</p> | <p>○ ペアの特长を考えて、交流の際に必要な道具を準備したり、作成したりすることができる。</p> <p>○ 交流で生じた問題から解決方法を考え、次なる交流の際の自分とペアの関係づくりを生かすことができる。</p> |
| <p>運動会で思い出をつくらう</p> <ul style="list-style-type: none"> ペアとともに行ける計画を立てる 養護学校の友達と遊んだ内容を振り返って、どんな種目にすればよいか考えよう。 準備や練習に励む 活動にもっと取り組む いっしょに運動会の種目に参加して楽しかった。また会いたいなあ。 <p>（10時間）</p> | <p>○ 運動会の交流種目を計画する場面において、3年体育『かけっこ・リレー』で学んだ「自分の力を知り、少し努力すればできそうな技を課題に設定する」という思考様式を転移・活用させる。 <情報創造場面></p> | <p>○ 運動会の交流種目を計画する場面において、前回の交流で得た各グループの情報を統合し、実際に取り組めるかどうかを判断することができる。</p> | <p>○ 運動会の交流種目に取り組む際、ペアの心身の状態を考慮しながら、気持ちを高め合う言葉かけや行動をとることができる。</p> <p>○ 相手と心を通わせることの喜びを味わい、次なる出会いに向けての見直しをもととする。</p> |
| <p>「交流ハイキング」を楽しもう</p> <ul style="list-style-type: none"> ペアととも楽しむ計画を立てる 活動をもっと楽しむ ペアの友達と学校以外の場所でも楽しみたい。前より仲良くなれた気がするよ。 <p>（6時間）</p> | <p>○ 自分たちの考えた活動を相手に伝える場面において、3年国語『いろいろな伝え方』で学んだ「言葉に代わるもの伝達機能を考える」という思考様式を転移・活用させる。 <情報発信場面></p> | <p>○ ハイキングの目的地やそこまでの交通手段について情報を収集し、道中の注意点や目的地での活動内容を考えることができる。</p> | <p>○ 前回までの活動の反省を踏まえて、交流する際に必要な道具を準備したり、接し方を工夫したりすることができる。</p> |
| <p>交流で得たすばらしさを広めよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ホームページをつくらせて発信する 養護学校の友達は目標に向かって頑張っていたね。いっしょに心を通わせることができてよかったな。 <p>（8時間）</p> | <p>○ 交流の様子を表すHPの作成において、4年国語『知らせたい、あんなこと』で学んだ「5W1Hに気を付けて読み手に分かりやすい文章を構成する」という思考様式を転移・活用させる。 <情報発信場面></p> | <p>○ ホームページとして発信したときの効果と影響について理解する。</p> <p>○ 交流相手の立場に立ち、ホームページにまとめて発信すべき内容と、発信すべきでない内容について判断することができる。</p> | <p>○ 養護学校の友達との交流で学んだ相手のことを考えた行動を、同じ学校・学級の友達に置き換えて考え、これからの自分の態度について目標をもつことができる。</p> |

＜ユニット計画例 第4学年前期ユニット「つながる・広がる 人と人」＞

（2）本年度の研究の重点「情報リテラシーを高める教育の導入」

① 「情報リテラシー」を高める教育の必要性

総合的な学習の時間が創設される以前は、学校にコンピュータが整備されても、それを使いこなすためのスキルやモラルを身に付ける時間を確保することは難しかった。しかし、社会の急激な情報化を背景に、総合的な学習の時間の創設によって、学校における情報教育が一気に加速した。総合的な学習の時間の活動例に横断的・総合的な課題として「情報」が例示されたためとも考えられる。しかし、その内容には、いくつか課題が見られる。

- コンピュータの使い方指導が主流で、内容がおきざりにされている。
 - 学校にコンピュータが使える推進役の教師が在籍しているかどうか、その教育の質を大きく左右している。
 - 総合的な学習の時間と教科学習との内容面での関連が十分に図られていない。
 - 学年に応じた体系的な指導が実施されていない。
 - 「情報リテラシー」を高める指導が十分なされていない。
- 等

中でも、前述の答申の指摘にあるように、コンピュータの目的に応じた操作技能を高めるだけでなく、子どもに、マナーやルール、著作権の問題などについての知識をも身に付けさせることは急務である。社会のIT化が加速するのに伴い、インターネット等での情報機器を使用したトラブルに巻き込まれるケースが多くなってきており、このことは小学生にとっても例外ではないからである。

また、「情報教育の実践と学校の情報化～新『情報教育の手引き』～」(平成14年6月文部科学省 以下、新「情報に関する手引き」)においても、次のように述べられている。

情報化が人間や社会にどのような光と影を及ぼしうるか、また、その影の影響を克服するためにはどのような注意や配慮が必要なのかを考えさせる必要がある。

本校でも昨年度、ルールやマナー、著作権の問題に関して、ユニットに位置付けてきた。しかしながら、その内容が体系的に配置できているか、また各ユニットのどの場面において学ばせるのが効果的であるか、という新たな課題が生まれてきた。

そこで本年度は、身に付けさせたい「情報リテラシー」を発達段階という視点から見直すとともに、各ユニットに位置付けていくこととした。

② 小・中9年間を見通した「情報リテラシー」の措定

小学校において、どのような内容を、どの段階で指導していくかは重要であり、新「情報に関する手引き」でも、従来の実践に対して、以下のように指摘している。

情報教育の問題点として、体系的な指導が行われていないことが挙げられる。

「情報リテラシー」は小学校段階で完結するものでなく、中学校・高等学校での学習を通して身に付けていくものである。そこで、平成15年度から17年度までの研究開発学校としての取り組みを基に、小・中9年間を見通した「情報リテラシー」をまとめ、中学校と連携しながらその能力の育成を図ることとした。

| | 情報倫理 | コンピュータの操作 |
|---------------------|--|---|
| 小学校 第1学年 第2学年 | ① 文字の色や大きさについて、読む人が見やすいものにするための大切さについて考える。 ② 自分のどんな気持ちを文章で伝えるべきかについて考える。 | ① コンピュータの起動と終了、マウスを利用して操作することができる。 |
| 小学校 第3学年 | ① 写真を使う場合にはその写真に写っている人や物の所有者に許可を得ることの必要性について考える。 | ① ブラウザを利用して調べ学習ができる。 ② 文書処理ソフトウェアや図形処理ソフトウェアに写真を貼る作業ができる。 |
| 小学校 第4学年 | ① Webページから情報収集する際の制限について考える。 ② インターネットを利用して、目的とするものを検索するために、その観点について考える。 | |
| 小学校 第5学年 | ① 様々なWebを閲覧し、情報伝達の内容や方法について考える。 | ① Webページの閲覧に加え、他のソフトウェアも利用して内容をまとめることができる。 |
| 小学校 第6学年 | ① メールを利用する際の表現について考える。 ② 他人の写真や文章などを閲覧したり加工したりする際には、必ずその人に確認をとることの必要性について考える。 | ① 電子メールのソフトウェアを利用し、送受信ができる。 ② 文書処理ソフトウェアや図形処理ソフトウェアを利用して、目的に応じた処理ができる。 |

| | | |
|-------------|--|---|
| 中学校 第1学年 | ①人間が手で処理する場合と、コンピュータを利用する場合の違いを例にコンピュータを利用する意味や価値及びデータの重要性について考える。 ②情報管理の意味から、フォルダの概念を知り、情報を整理する必要性について考える。 | ①自分のIDとパスワードによりサーバにアクセスし、フォルダを管理することができる。 |
| 中学校 第2学年 | ①著作権、肖像権などの言葉の意味について知り、情報の扱いについて考える。 ②各種情報の伝達方法について知り、コンピュータを用いた情報伝達の問題点について考える。 | ①マルチメディアを利用して入手した情報をコンピュータに入力することができる。 ②一時的な電子メールのIDとパスワードを利用して生徒同士でのメール交換を行うことができる。 |
| 中学校 第3学年 | ①マルチメディアを利用し、情報を加工し発信する際の手順と状態を考える。 ②ネット上の個人情報漏えいは自己の責任であることを考える。 | ①インターネットを利用して、放送基準を入手し、その基準に即した画像や映像の処理等を行うことができる。 ②目的に応じたWebページを作成し、情報の発信を行うことができる。 |

＜小・中9年間を見通した「情報リテラシー表」＞

③ ユニットへの位置付け

「情報リテラシー」の育成を具現化していくため、上記の「情報リテラシー」をユニット計画の中に明確に位置付けることにした。

| | | |
|--|--|--|
| <p>第5学年未来学習（前期） ○ ユニット名 「綾川発 環境調査隊Ⅴ」（自然科） ○ ユニット計画 （総時数 40時間）</p> <p>主な活動過程と子どもの意識</p> <p>先輩の研究から学ぼう ● 今までの研究をホームページで調べる。 （4時間＋フィールド調査）</p> <p>調査の結果をグラフに表そう ● 遠足で調査したデータに過去のデータを加えて、わかりやすく表す。 情報操作 5-① （2時間）</p> <p>川の生き物や環境を調査しよう ● 何を調べていけばよいか話し合う。 綾川を調査して、もっと調べたいことを話し合う。 ● 川の川・他の生物・天気・時間・環境ホルモン グループに分かれて川の生き物や汚れ環境ホルモンについて調査する。 情報倫理 5-① （2時間）</p> <p>私たちができることは 未来への提案 ● 自分たちができることを話し合い、実践する。 今までの調べを生かして、自然豊かな川にするためにも自分たちができることを考え取り組もう。 （7時間）</p> | <p>当該学年で扱う「情報リテラシー」を前後期両方のユニットに位置付ける。</p> <p>情報倫理に関する内容は「倫理」コンピュータ操作に関する内容は「操作」と表記する。</p> <p>学年とその項目を表記する。</p> | <p>第5学年未来学習（後期） ユニット名 「香川の文化 さぬきうどん」（文化） ユニット計画 （総時数 35時間）</p> <p>主な活動過程と子どもの意識</p> <p>香川の文化について考えよう ● クエーピングで考えを広げよう。 文化とは人間が創り出した様々なことを意味するんだな。・その中でも香川の文化といえば。・ （2時間）</p> <p>調べる対象を決定しよう ● たくさんある文化の中から、何を調べるか決定しよう。</p> <p>実際に作ってみよう。人の写真も撮っておこう。 ● 調べたことをwebページにまとめよう。 お店屋さんを紹介するページを作ろう。そのとき、写真やメニューも一緒に紹介しよう。 情報操作 5-① （2時間）</p> <p>● webページの内容について考えよう。 うどん屋さんの写真を載せたり、他のページから取り込んだ写真を載せるといいのだろうか？ 情報倫理 5-① 情報倫理 6-② ● 専門家の方の意見を聞いて修正しよう。 うどん屋さんの写真を載せるには許可が必要。また他のページの写真を使う際には許可を得なければいけない。 （2.5時間＋フィールド調査）</p> <p>文化を継承しよう ーうどん作り体験ー ● おじいちゃんおばあちゃんにうどん作りを教えてもらって、うどんを作ろう。 文化は継承していくもの。おじいちゃん、おばあちゃんからその文化を引き継ごう！ （7時間）</p> |
|--|--|--|

＜「情報リテラシー」を位置付けたユニット計画＞

このように、トピック的に取り扱うとともに、前期・後期と繰り返し位置付けることによって、より着実に「情報リテラシー」を高めることができると考えた。

なお、当該学年のねらいとしては設定されていない「情報リテラシー」であっても、必要と思われる場面や問題を、機会を捉えて指導することが重要であると考え、適宜取り扱うことにした。そして、このように弾力的にリテラシー表を活用していくことによって、さらに発達段階や内容に即したものに修正していきたい。

④ 実践例（第5学年）

ア 前期ユニット「綾川発 環境調査隊V」

操作5-①

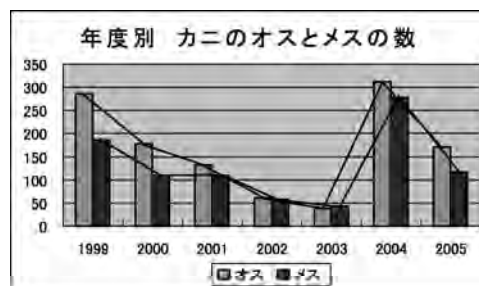
Webページの閲覧に加え、他のソフトウェアも利用して内容をまとめることができる。

調査したカニの数を過去のデータと共にグラフ化する際、表計算ソフトを活用して、より分かりやすいグラフにするための工夫を考える活動を行った。

子どもたちは自由にグラフを作成する中で、「年ごとのカニのオスとメスの数の比較」と「6年間の数の変化」を表す必要があることに気付いた。しかしながら、子どもたちが作成したグラフの中には、その両者を同時に表すことができているグラフはなかった。

そこで、個々のグラフの良さを考えていくうちに「カニの数を比較する棒グラフと、変化を表す折れ線グラフを組み合わせれば、より分かりやすいのではないか。」という結論を見出し、右のグラフを作成した。

グラフを作成する際にも、見た目により分かりやすくするにはどうすればよいかといった相手意識をもって作成することができた。また、表計算ソフトは、子どものイメージしているグラフを容易に作成することができるため、表やグラフの作成に多大な時間をかけることなく、「表現の工夫」に焦点化して学習することができた。



<雌雄の数とその変化がわかるグラフ>

イ 後期ユニット「香川の文化 さぬきうどん」

情報倫理5-①

様々なWebページを参考にして、情報伝達の内容や方法について考える。

調べたことをホームページ作成ソフトを用いてWebページにまとめ、正しい情報発信の方法について考える活動を行った。

まず、「うどん屋の写真」「メニュー」「値段」を掲載しているグループを題材として取り上げ、これらの情報を発信してもよいかどうかについて考えることにした。話し合いを通して、「写真を掲載するには、お店の許可が必要ではないか。」「写真以外にも住所や電話番号を載せた方がよいのでは。」という意見が出された。

その後、専門家の方とのビデオ会議で「写真を載せる際には許可が必要だ。」「メニューは載せてもよいが、何日現在かを記入しなければいけない。」「雑誌や本などから取り込んだ画像は許可を得る必要がある。」等、「情報リテラシー」に関する詳しい意見を頂いた。

具体的な場面を通して、ルールやマナーについて学習したことによって「情報を発信するために気をつけなければいけないことは何か」「情報やメディアをどのように選択しなければいけないか」といったことを考え、Webページで発信することができた。



<専門家の方とのビデオ会議>

また、本校作成の「情報リテラシー表」(p75参照)では、著作権やプライバシーの問題は第6学年に位置付けているが、学習状況の必要性から、本ユニット(第5学年)で取り上げることにした。必要と思われる場面や問題が生じた際、弾力的にリテラシー表を活用し、その機会を見逃すことなく適切に指導したことで、その効果があったのではないかと考える。